

て、翌年当時としては画期的な合口用水が開削された。これには、富山市という都市の存在が大きく影響していた。その後扇状地のもつ急勾配という自然条件をいかして、常西用水幹線水路を使用する発電事業が開始され、さらに発電使用後の放水を受けるようになった。昭和40年以降は、本来農業用水である常西用水が、富山市の上水道と工業用水道に原水を供給するという、言わば都市用水への転用が行なわれたのである。この場合、左岸において富山市という都市が存在することが根底の条件であり、農業用水側と都市側の事業がうまくかみ合い、転用がなされたと言える。

一方、常願寺川右岸は明治24年の大洪水時においても、旧扇状地である段丘上に位置するという自然条件のため被害が少なかった。また、左岸の富山市に匹敵するほどの都市もなかったこととあわせて、用水合口事業は実施されなかった。しかも皮肉なことに、左岸だけ用水合口化を完成し有利な取水を実行していたことが、かえって右岸の合口用水開削を遅らせる要因となった。そして昭和28年、ようやく左・右岸の兩岸合口事業が達成されたのである。

以上のように、同じ河川の左岸と右岸では非常に大きな差異が生じている。すなわち、常願寺川左岸においては、さまざまな有利な条件が重なって、常西用水は本来の農業用水という性質のみならず、都市用水・発電用水としての重要な側面を持つに至っていると言える。常西用水土地改良区は、北陸電力と富山市水道局に水を提供することによって、多額の補償金を得、用水路の維持管理を受け持つてもらうことになった。この有効な水利用の結果、常西用水側では大幅に負担が減少し、用水の反当賦課金は16円という極めて低い額になっている。また、富山市の水道料金も全国的にみて非常に安くなっていることがわかった。他方、常願寺川右岸は同じ河川の対岸でありながら左岸のような好条件が全く存在しない。従って、常東用水の方は発電用水や都市用水に利用されることもないわけである。反当賦課金は410円であり、左岸の16円に比較して非常に高額であることがわかる。

農業用水の最近の問題点としては、単位あたりの必要用水量の増加があげられる。兼業化とは場整備による機械化の進展によって、農作業が休日に集中して行われるようになった、そのため、農地転用が進み灌漑面積は減少しているにもかかわらず、水需要のピークが集中しピーク時の必要用水量はかえって増大したのである。また、農業用水が市街地を通過して再び下流の水田で利用されるために水質障害の問題も生じている。

## 狩野川流域の沖積平野の土地利用

嶋 ゆう子

目的は、狩野川流域の洪水を起こしやすい地域の特徴を知ることである。対象とした地域は、田方郡菰山町を中心とする、洪水の常習地である。

まず、明治時代以降の、洪水による大きな被害をまとめてみた。すると、ほとんど毎年のように被害を受けている地域があることがわかる。慢性的に洪水を繰り返している土地の人々は、船を持つ。水が来そうだという時には畳を上げて待っている等の消極的な対処をしている。一方、放水路を作ろうという運動が明治時代の中頃から始まり、大正年間には、狩野川治水組合が結成され、放水路建設

の運動を推進した。しかし、その後一部地元民の反対などで着工までに紆余曲折を経、結局、完成されたのは、昭和40年の出水期前である。

さて、昭和33年の狩野川台風時の被害は甚大であった。特に沿岸の農地が埋没あるいは冠水した。狩野川流域は沈降性地形の為山地と平坦部の境界が非常に明瞭になっていて、段丘はわずかに東部に発達しているだけである。そのため、平坦部は全域にわたり被害を受けている。ただし、下流部の狭さく地形より河口側の沼津市等では、ほとんど氾濫は起こらない。また、被害の型は上流部・中流部・下流部でかなり異なるし、微地形により多少の差違がみられた。

狩野川台風時の復興状況は、葦山村では翌年に100%となっている。災害後はまた葦山村では、大規模な区画整理がおこなわれ10aの圃場に整備された。それに伴って、交換分合も少しおこなわれたようである。

葦山町は農業が産業全体の根幹として位置づけられており、それは、将来においても、変わることはないだろう。現在では、農業の中では、収量からも収益からも、中心となっているのはイチゴである。これは、もともと米の裏作としてつくられていた麦にとって代わったものであるが、品種改良・栽培技術の進歩により、戦後急速に発達した。また近年は、メロン・トマト・ナス・花卉などが、施設園芸にとり入れられ、発展の兆しをみせている。

## 三浦半島の海面利用と沿岸集落

竹 内 由起子

### (1) 研究の目的

三浦半島は首都東京の近郊に位置し、その大きな影響下にあるとともに、神奈川県漁業の中心、海洋観光の拠点として、独特な海面利用のみられる地域である。その海面の多様かつ有効な利用は、都心に近接しているという位置的条件に加えて、湾入と砂浜の交互する複雑な海岸線、穏やかな海況、豊かな水産資源といった絶好の自然環境が作用した結果である。本論文では、三浦半島の海面利用の特性と、海に深い関わりをもって展開される沿岸集落の経済活動の諸相を考察することを目的としている。

### (2) 研究の枠組

第一章では、地域研究の基礎となる自然、人文環境の概観を述べた。

第二章では、漁業について、県漁業における位置づけというマクロな視点から始めて、次第的にしぼり、最後には半島内各地区ごとの漁業形態分析を行った。その際、近年三浦半島漁業に最も大きな変化をもたらした要因と思われる、わかめ養殖業導入に焦点をあて、昭和40年から52年にわたる12年間の動向把握を中心に論をすすめた。

第三章は、沿海資源に立脚した4種類の観光、海水浴・景勝地遊覧・ヨット・遊漁について、各々の現状と特色を検討した。

続く第四章では、二・三章の理解を踏まえた上で、特色のあるいくつかの地区を選定し、沿岸集落